

3. 相川の近世都市化と寺社

(1) はじめに

16世紀後半における大鉱脈の発見以後、諸国から人びとが押し寄せ、相川は一挙に都市化をとげた。それと並行して相川内には多くの神社や寺院が建立され、その数は江戸時代の中葉（寛永年間頃）でそれぞれ約20社、140寺あまりにも及んだ。近世から近現代にかけての栄枯盛衰のなかで、特に相川の寺院は移転や合併、退転、廃寺を繰り返し、現在では寺院30寺（浄土宗4・浄土真宗8・法華宗9・真言宗6・天台宗1・曹洞宗2）を残すのみである。「山」という資源に存立基盤をもった鉱山都市相川にとって、鉱石の発掘量＝金銀の産出量は都市の経済的・社会的情勢を直接に左右した。寺院もまたこれとは無縁ではなく、むしろその動向は都市空間の歴史的な展開と呼応するものであろう。この点において寺社の存在形態を都市空間との関係のなかで捉えることは、近世都市化の展開や都市構造を理解するための重要な作業といえる。

相川に建立された寺社の全体像は現地調査や地誌・文書の整理によっておおむね把握がなされており、研究上の基礎的な蓄積は十分整っているといえる⁽¹³⁾。しかし、寺社と鉱山都市相川との関係の重要性については早くから注目されているものの、いくつかの先行研究を除けば、相川の鎮守としての神社や寺町の存在、鉱山の衰退とともに山上（上相川）から山下へと寺院が移転されたといった概要の指摘のみにとどまっている⁽¹⁴⁾。そこで、本稿では寺院の存在形態を通して相川の近世都市化について考えたい。まず寺院の開基・移転年代と立地・分布から18世紀中期頃の相川寺社地の歴史的位置と寺院の存在形態を概観する（(2)参照）。その上で（2）でみいだされた「寺院地区」ごとに、その形成過程と寺院の存在形態について明らかにしていく（(3)参照）。つづいて、相川の寺院の半数を占める浄土宗・浄土真宗寺院の動向から、寺院の都市への進出という側面を検討する（(4)参照）。最後に、寺院・神社と町との関係が作りだす小地域の在り方に焦点をあて、近世初頭の都市化の分析への視座を提示してみたい（(5)参照）。

(2) 共時態のなかの寺院

相川の寺院の多くは近世初頭に起立され、その後も他国からの転入が続いた。相川内外への移動や合併、退転や廃寺などは重層的に進行しており、その様相は極めて複雑である。そのため相川における寺社の全体像を把握するためにはまず「共時態のなかの寺院」、つまりある

特定の時期における相川内の寺院の空間を確認する必要がある。そこで、宝暦期（1751～63）に編纂され相川の寺院が網羅的に記録されている『佐渡相川志』⁽¹⁵⁾、『佐渡国寺社境内案内帳』（以下、「寺社帳」と略す）⁽¹⁶⁾に基づいて18世紀中頃の相川の寺院についての検討からはじめたい。

表5—3は上記資料中に記載された寺院の宗派や本末関係、開基（転入）年代の情報を地域別にまとめたものである。すでに上相川地区が放棄されはじめていた18世紀において、上相川に立地する寺院については不明な点が多いが、所在がわかるものに限れば相川内では計82寺が確認できる。18世紀半ば頃、すでに最盛期の約3分の2にまで寺院数が減少していたとわかる。宗派別にみていくと法華宗20寺、浄土宗20寺、浄土真宗18寺と3宗派で全体の3分の2を占め、ついで禅宗9寺、真言宗7寺、天台宗5寺、臨済宗2寺、時宗1寺と続く。すでに多くの先行研究で指摘されているように開基年代は慶長期が最も多く、ついで金銀の産出量が盛大であった元和～寛永期に集中している⁽¹⁷⁾。ここから相川の寺院のほとんどが17世紀中頃までには相川内で成立していたことが明らかである。一方、転入時期に着目すると宗派を問わず元禄期と享保期に多くみられ、いずれの寺院も相川内での移動が目立つ。これは金銀山の衰微と軌を一にして寺院の移転がおこなわれたことをよく示している。

18世紀中期以降になると寺院の開基や相川内での移転は少なく、ほとんどが廃寺かそれに伴う他寺院への合併であり、基本的な寺社地の骨格に変化はない⁽¹⁸⁾。すなわち、宝暦期の寺社地の空間構成は、近世相川のひとつの到達点といえる。そして寺社地の形成は、居住域の急速な拡大とともに寺院や神社の簇生をみた慶長～寛永期にピークをもち、金銀山の衰微がみられた17世紀後半から18世紀初頭にかけての移転や合併によって安定的なかたちをとったものと歴史的に位置づけられると考える。

次に寺院の立地と分布についてみていこう。図5—60は相川の寺社を宗派別に段彩図上にプロットしたものである。この図からまず指摘できるのは、浄土真宗寺院の多くが町人地内に立地していることである。そのほか大局的には宗派別分布の特徴はあまりみいだせないが、ここで注目すべきは寺院（や神社）が集中するいくつかの地域（以下「寺院地区」と呼ぶ）が認められるこ

表5—3 相川寺院一覧(宝暦期)

下町地区				
	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
江戸沢町・一丁目～四丁目・五郎左衛門町				
1	大安寺	浄土宗	京知恩院末	慶長11年(1606)
2	来迎寺	浄土宗	京知恩院末	元和元年(1615)／ (寛文年中=1661～72)
3	広源寺	浄土宗	京知恩院末	元和7年(1621)
4	永弘寺	浄土真宗	東本願寺末	元和3年(1617)
5	聞名寺	浄土真宗	東本願寺末	元和4年(1618)／ (享保3年=1718)
6	金剛院	真言宗	沢根村曼荼羅寺末	元和7年(1621)
7	玉泉寺	法華宗	京妙顕寺末	慶長11年(1606)／ (寛永2年=1625)
8	円行寺	法華宗	阿仏坊村妙宣寺末	寛永元年(1624)
9	本昌寺	天台宗	四丁目弾誓寺末	文禄元年(1592)
10	万福院	天台宗	撰州大坂天王寺末	慶長19年(1614)
11	弾誓寺	天台宗	相州浄瓮願寺末	寛永13年(1636)
坂下町・炭屋町・紙屋町・大間町				
1	願龍寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長7年(1602)／ (宝永2年=1705)
2	光楽寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長19年(1614)／ (元禄3年=1690)
3	勝善寺	浄土真宗	東本願寺末	元和8年(1622)／ (元禄年中=1688～1703)
4	称念寺	浄土真宗	東本願寺末	寛永8年(1631)／ (正徳3年=1713)
5	了円寺	浄土真宗	椎泊村願誓寺末	寛永13年(1636)
羽田町				
1	御坊常徳寺	浄土真宗	西本願寺末	元和元年(1615)
2	広永寺	浄土真宗	加州専光寺末	慶長8年(1603)
柴町				
1	専光寺	浄土宗	京知恩院末	元和6年(1620)
2	大泉寺	臨済宗	京東福寺末	元和8年(1622)
3	泉龍寺	禪宗	下山之神町総源寺末	明暦2年(1656)以前
石扣町				
1	専法寺	浄土真宗	西本願寺末	元和元年(1615)
下山之神地区(下山之神町・坂下町)				
	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	厳常寺	浄土宗	京知恩院末	寛永5年(1628)
2	大乘寺	真言宗	武州護持院末	慶長17年(1612)
3	法泉寺	法華宗	大野村根本寺末	寛永元年(1624)／ (宝永元年=1704)
4	教寿院	天台宗	武州東叡山寛永寺末	慶長12年(1607)
5	総源寺	禪宗	吉井村剛安寺末	元和5年(1619)
6	長泉寺	禪宗	下山之神町総源寺末	元和7年(1621)
下寺町				
	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	法界寺	浄土宗	京知恩院末	応仁年中(1467～68)／ (慶長11年=1606)
2	定善寺	浄土宗	京知恩院末	慶長年中(1596～1614)
3	銀山寺	浄土宗	下寺町法界寺末	永正(1504～)以前／ (慶長11年=1606)

4	法円寺	浄土宗	下寺町法界寺末	慶長年中(1596～1614)
5	真如院	真言宗	紀州平等院末	慶長18年(1613)
6	福泉寺	真言宗	中原村長福寺末	慶長17年(1612)／ (貞享2年=1685)
7	妙福寺	法華宗	京本国寺末	寛永14年(1637)
8	正法寺	法華宗	京本国寺末	寛永5年(1628)
9	円徳寺	法華宗	京本国寺末	慶長元年(1596)
10	本敬寺	法華宗	京妙顕寺末	慶長11年(1606)／ (享保11年=1726)
11	蓮長寺	法華宗	京妙覚寺末	元和5年(1619)
12	妙円寺	法華宗	市野沢村妙照寺末	慶長元年(1596)／ (享保元年=1716)
13	妙輪寺	法華宗	大野村根本寺末	慶長年中(1596～1614)
14	本典寺	法華宗	京要法寺末	元和9年(1623)
15	昌安寺	禪宗	下寺町高安寺末	元和4年(1618)
16	観音寺	禪宗	信州定津院末	慶長19年(1614)
17	金昌寺	禪宗	信州定津院末	慶長19年(1614)
18	高安寺	禪宗	吉井村剛安寺末	元和元年(1615)
19	大龍寺	禪宗	湯上村湖鏡庵末	元和元年(1615)

南沢町・中寺町

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	大超寺	浄土宗	京知恩院末	元和9年(1623)
2	法蓮寺	浄土宗	下寺町法界寺末	寛永元年(1624)
3	相運寺	真言宗	沢根村曼荼羅寺末	慶長7年(1602)／ (享保元年=1716)
4	善行寺	法華宗	阿仏坊村妙宣寺末	寛永5年(1628)
5	長明寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長19年(1614)
6	瑞仙寺	法華宗	大野村根本寺末	寛永元年(1624)
7	妙体寺	法華宗	大野村根本寺末	寛永3年(1626)

上町地区(上町西半)

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
弥十郎町				
1	大願寺	時宗	相州清浄光寺末	慶長13年(1608)
米屋町				
1	願泉寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長11年(1606)／ (寛永2年=1625)

上町地区(上町東半)～上相川

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
六右衛門町				
1	広伝寺	浄土宗	京知恩院末	元和3年(1617)／ (元禄12年=1699)
2	広円寺	浄土真宗	西本願寺末	元和元年(1615)／ (元禄12年=1699)
3	大福寺	浄土真宗	西本願寺末	慶長17年(1612)
諏訪町				
1	万行寺	浄土真宗	東本願寺末	元和5年(1619)
左門町				
1	蓮光寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長8年(1603)
2	西念寺	浄土宗	京知恩院末	元和3年(1617)
次助町(桐ノ木沢)				
1	源昌寺	浄土宗	京知恩院末	慶長12年(1607)

2	西光寺	浄土宗	京知恩院末	元和元年(1615)
3	妙伝寺	法華宗	大野村根本寺末	慶長9年(1604)／ (享保2年=1717)
4	覚性寺	法華宗	阿仏坊村妙宣寺末	寛永7年(1630)／ (元禄年中=1688～1703)
5	法久寺	法華宗	大野村根本寺末	元和8年(1622)
6	妙法寺	法華宗	阿仏坊村妙宣寺末	寛永元年(1624)
7	興禪寺	臨済宗	京東福寺末	慶長16年(1611)
五郎右衛門町				
1	称名寺	浄土真宗	東本願寺末	慶長18年(1613)／ (寛永元年=1624)
鍛冶町				
1	専念寺	浄土宗	京知恩院末	慶長元年(1596)
2	玄徳寺	浄土宗	京知恩院末	慶長17年(1612)
奈良町				
1	専照寺	浄土真宗	東本願寺末	元和元年(1615)
2	妙音寺	禪宗	下山之神町総源寺末	慶長11年(1606)
柄杓町				
1	法華寺	法華宗	京妙覚寺末	慶長18年(1613)／ (貞享元年=1684)

下戸地区

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	立岩寺	浄土宗	京知恩院末	慶長年中(1596～1614)／ (寛永6年=1629)
2	長安寺	浄土宗	江戸沢町大安寺末	慶長13年(1608)
3	金光寺	真言宗	沢根村曼荼羅寺末	慶長6年(1601)

鹿伏村

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	観音寺	真言宗	沢根村曼荼羅寺末	慶長13年(1608) 以前
2	医王寺	天台宗	武州東叡山寛永寺末	慶長17年(1612)

下相川村

	寺院名	宗派	本末関係	開基／(転入時期)
1	靈山寺	浄土宗	下寺町法界寺末	慶長5年(1600)
2	本興寺	法華宗	駿州富士本門寺末	永正3年(1506)／ (慶長6年=1601 以後)

「佐渡国寺社境内案内帳」・『佐渡相川志』により作成

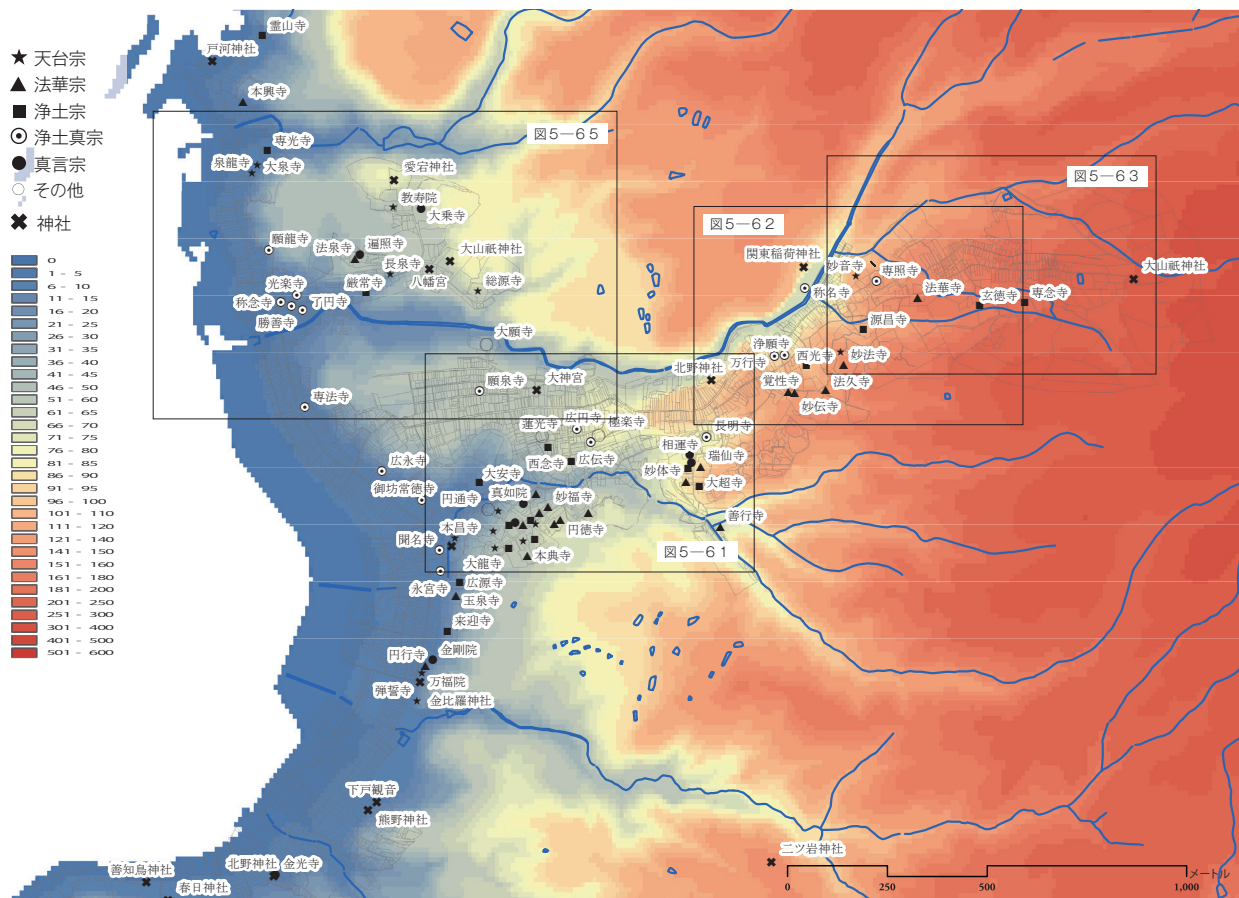


図5-60 相川の寺社分布(宝暦期)

とである。具体的な検証は後述するが、それらは寺町の名をもつ上・中・下寺町をはじめ、初期鉾山集落跡である上相川の南側や左門町・六右衛門町周辺、下山之神町周辺などであり、このような寺院地区を単位として相川の寺社地は構成されていると考えられる。

さて、近世都市における寺院の存在形態とはどのようなものであったのであろうか。伊藤毅は寺院境内として①寺町型、②町寺型、③境内型の3類型を提示し、京都・大坂・江戸を事例にそれぞれの特徴を分析している⁽¹⁹⁾。この類型をもとにすれば、近世相川の寺院は中世以来の都市領主としての性格をもつ③境内型はみられず、①寺町型と②町寺型によって構成されていると考えられる。先にみたように浄土真宗寺院の多くは典型的な②町寺型といえ、伊藤の分析した大坂の事例と類似した特徴を持ち、「寺社帳」によればほとんどの境内地が「町屋舗」であったことがわかる。他宗派の寺院境内地は「除地」であることから、相川でも浄土真宗寺院は他宗派とは別の存在形態をもっていたといえる。絵図⁽²⁰⁾に描かれる様子からは、宝暦期にはすでに本堂の建築形式をもっているが、当時の境内は移転後のものが多く、開基当初は「道場」としての建築形式をもつものも少なくなかったのではないだろうか⁽²¹⁾。一方、寺院地区をかたちづくる寺院のほとんどは①寺町型といえる。

ただし、この3類型は近世都市全般にも適用可能と考えられるが一定の留保が必要である。伊藤も江戸を事例とするなかで述べているように、寺院の集合形態は個別具体的な地区に即して読み取るべきであろう⁽²²⁾。のちにみるように相川の寺院地区はいわゆる寺町的な均質な構成をとらず、地形との関係や各寺院の成立過程とその動向、願主や建立者の意図をもとに形成・創出された。次項では相川の寺社地を構成する寺町型の寺院が展開する寺院地区のそれぞれの形成について具体的にみていく。

(3) 寺院地区の形成

ここでは先にみた寺院地区の形成と寺院群の集合原理を分析する。これら寺院地区は宗派や本末関係などの宗教的、檀家や町、願主との社会的な関係に加え、境内地の規模や寺院の立地する場所の地形など空間的な条件に基づいてかたちづけられていると考えられる。以下寺院地区(i~iii)ごとにわけて考察していく⁽²³⁾。

i) 寺町地区—相川の「寺町」

相川には「上」「中」「下」を冠する3つの寺町が存在する。中・下寺町はどちらも台地のへりに位置し、斜面上に一定の地形的なまとまりをもって寺院群が展開している(図5—6 1)。一方、上寺町には町域(現行)には

まとまったかたちで寺院が存在していたようすは窺えない(図5—6 2)。むしろ上寺町北東に位置する次助町や庄右衛門町、上相川地区の南側にあたる地域に寺院が散在しており、開基年代をみても山上から山下に向かって順に展開をみたわけではない。ここからは上寺町は現行の町域で完結したものとはいえず、初期鉾山町地区にまで続く地形的な広がりをもったより広義の上寺町=寺院地区として考察すべきであろう。上寺町については後述することとし、ここでは中・下寺町を扱う。

a 中寺町

中寺町は南沢町の北側、南沢上流の北東部に位置している。この寺町には浄土宗2寺、浄土真宗1寺、真言宗2寺、法華宗3寺の計8寺がみられ、特に卓越する宗派はない。立地と開基年代をみると、浄土真宗の専福寺(元禄年中廃寺)、長明寺は当地での開基がそれぞれ慶長12年(1607)、19年(1614)と他に比べ早く、その立地も南沢沿いにあたり、台地斜面上の集合論理とは別のものと考えられるべきであろう⁽²⁴⁾。

さて斜面上の寺院群をみていくと、元和末年から寛永初頭までの短期間のうちに浄土宗・法華宗寺院を中心に形成されたことがわかる。空間構成は等高線に沿った道沿いの両側に境内が立ち並ぶ寺町的なかたちをもつが(図5—6 1)、境内規模をみると東側の瑞仙寺は52間×27間、大超寺は25×25.5間であるのに対し、西側の境内は10~15間四方程度と東西でかなりの差がある。また開基年代も東側の寺院の方が早い。瑞仙寺は、本寺である加茂郡大野村根本寺の建立にもかかわった有力な山師の家系である味方但馬(家政)が願主となって父家重(元和9年=1623没)を祀るために建立された。大超寺は京都知恩院派であり、のちにみる慶長期にはじまる相川における浄土宗の教線拡大に関連すると考えられる⁽²⁵⁾。後発的に形成された西側の妙徳寺は瑞性寺と同じく大野村根本寺の末寺であり、法蓮寺は相川下寺町の浄土宗法界寺末である。

このように開基年代と本末関係をひもといていくと、東側の法華宗瑞仙寺をひとつの核、もう一方は浄土宗寺院の教線拡大の一手を核として中寺町という寺院地区が形成されていったことが窺える。法華宗善行寺や上相川からの移転によって建立された真言宗相運寺はそれら先行する寺院地区に入り込んでいったのであろう。斜面上の両端に位置するという立地もそのことを物語っている。

b 下寺町

相川で最も寺院が集中する地域である下寺町は、南沢下流域の南側、南沢を境として上町台地に北面する段丘

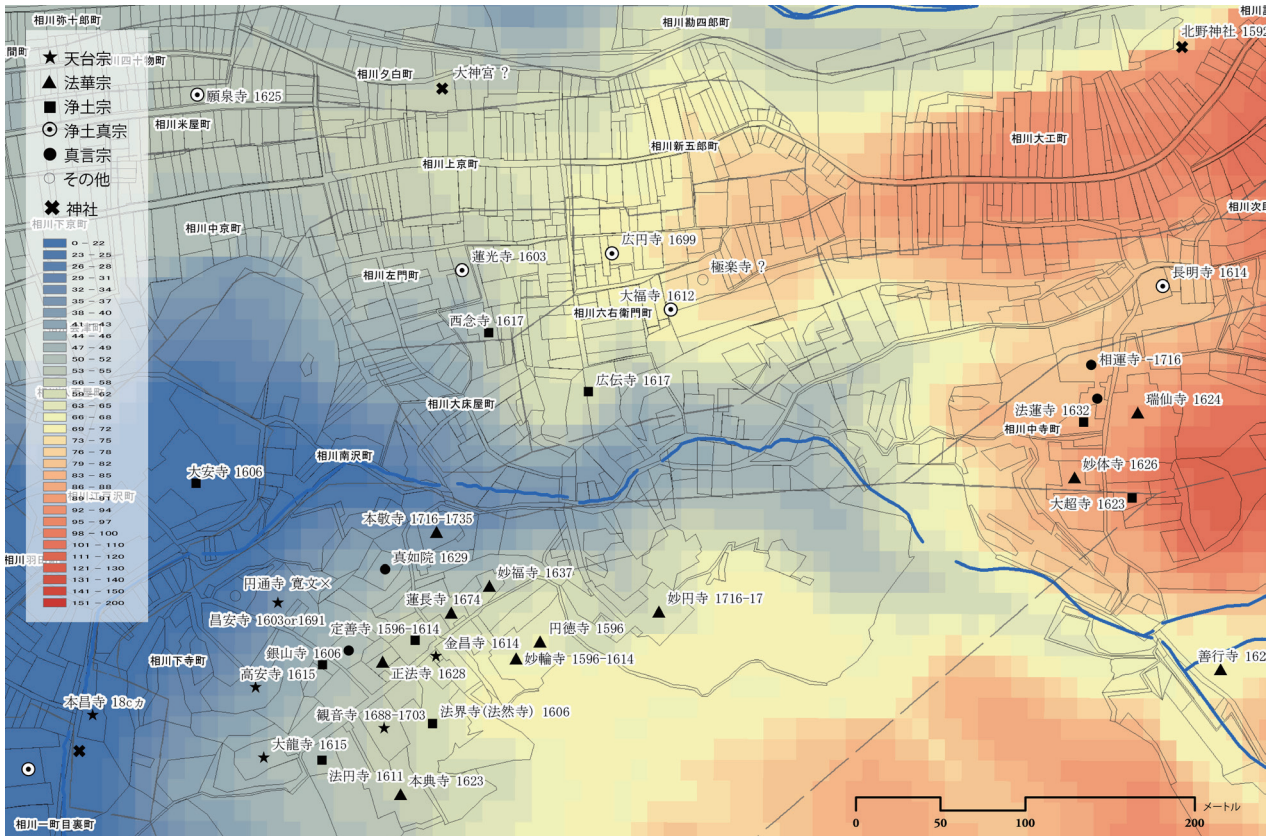


図5—61 中・下寺町と丸山周辺の寺社分布

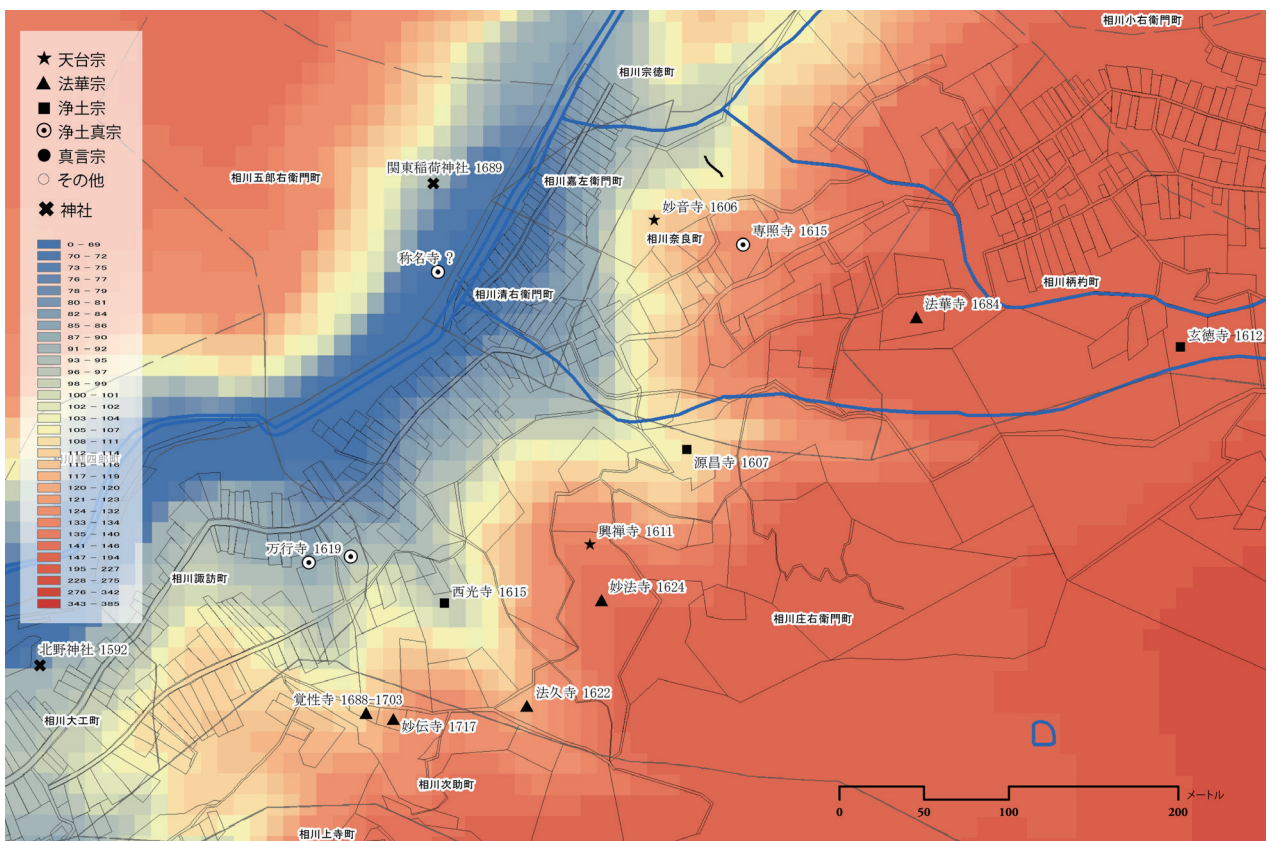


図5—62 間ノ山・上寺町周辺の寺社分布

斜面上にある。宗派別にみていくと浄土宗4寺、真言宗2寺、法華宗4寺、禅宗5寺であり、法華宗をはじめ浄土宗、禅宗寺院が多い。小規模に開けた台地上には中寺町と同様、等高線に沿った道を軸として両側に寺院街が展開し、さらに北西の南沢へと下る枝道沿いにも寺院が散在する二元的な空間構成をもつ(図5—6 2)。これらの開基年代からまず明らかなことは中寺町よりも早く下寺町が寺院地区として成立したということである。つまり、単純に山上から山下へと順をおって相川の寺社地が形成されたわけではないのである。このことは相川の町自体も山上から山下へという単純な形成はみていなかったことを示している。

一定期間に集中してみられた中寺町の形成に対して下寺町のそれはより段階的である。表5—3から寺院群を宗派別・年代順に整理すると以下ようになる。

慶長期

浄土宗3(法界寺・銀山寺・法円寺)、法華宗2(円徳寺・妙輪寺)、禅宗2(金昌寺・観音寺)

元和期

法華宗2(蓮長寺・本典寺)、禅宗3(高安寺・大龍寺・昌安寺)

寛永期

法華宗2(正法寺・妙福寺)、真言宗1(真如院)

貞享～享保期

法華宗2(本敬寺・妙円寺)、真言宗1(福泉寺)

下寺町のなかで最も早く開基した寺院は法華宗円徳寺であり、以降は慶長期後半に法華宗、浄土宗寺院が段丘斜面南東側にそれぞれ建立された。南東側の円徳寺、妙輪寺と法界寺は境内規模が大きく、北西側の寺院群は境内規模が小さい点において中寺町と同様の形態をもつといえる。銀山寺・法円寺はどちらも法界寺末寺で、本寺を吸着核に同時期に開基された。続く元和期に特徴的なのは禅宗寺院の開基である。当地の禅宗寺院のほとんどは元和元年(1615)に建立されており、すべてではないが境内には南沢からアプローチするかたちで参道が設けられている。また、元和・寛永期に開基された法華宗寺院は円徳寺、妙輪寺付近に集中して起立していることも注目される。一方、貞享～享保期にかけて当地に入植した寺院は次助町(妙円寺)など相川内から移転してきたものである。

以上、下寺町の形成過程を空間構成に即してまとめると、初期的には規模の大きな円徳寺や法界寺といった数カ寺が地形との即地的関係から開基され、当初これら寺院は点として存在し、寺院地区としてのまとまりは希薄であった。しかし、これら寺院は当地の重要な初期条件

となり台地中央から南沢にかけては浄土宗寺院が、台地北東側には法華宗寺院が集中的に起立していった。そして台地北西の禅宗寺院と、大きくは3つの宗派からなる複合的な寺院地区が形成されたといえる。寺院地区の境内地については、中寺町同様10間四方程度の境内＝テラスをそなえた寺院群が斜面上に段階的に立ち並ぶことで下寺町の二元的な空間構成が成立したのである。

ii) 上相川地区—山上の寺院群

先に述べたように上寺町は中・下寺町のような地形的なまとまりをもった寺町を形成していない。佐渡国における「元禄寺社帳」⁽²⁶⁾と宝暦期の「寺社帳」、『佐渡相川志』中での上寺町付近の寺院の所在地の記載を比較すると、後者2つで次助町や庄右衛門町と書かれた寺院群は、「元禄寺社帳」ではすべて上寺町と記載されている。このことは、上寺町が山側まで含まれる地帯として認識されていたことを示している。ここでは上寺町を上相川集落の南側までを含めたより広域を示す上相川地区と捉え考察していく。

宝暦段階ではすでに退転した寺院もあると考えられるためi)の寺町でみたような地区形成は容易には読み取り難いが、表5—3と図5—6 2・6 3から指摘できることをまとめると以下ようになる。

- ・上相川地区は上相川集落の南側を流れる桐ノ木沢、鍛冶沢を挟むかたちで突き出す段丘上のエリアから諏訪町に対し北面する山側のエリアにあたる。
- ・桐ノ木沢、鍛冶沢を境として上相川集落に北面する段丘面上に16世紀後半から17世紀初頭に浄土宗寺院の開基がみられる(専念寺・源昌寺・玄德寺)。
- ・諏訪町に対し北面するエリアには法華宗寺院が多く開基している。それらは上記の浄土宗寺院よりも年代が遅れ、元和末年から寛永初頭に目立つ(妙法寺・法久寺)、より西側に立地する覚性寺と妙伝寺は、元来上相川集落近辺に開基されていたものがそれぞれ元禄期と享保期に移転してきたものである。

これら寺院群の多くは緩斜面にわずかに開けた土地を起点に建立されていったと考えられる。この点では中寺町や下寺町地区と同様である。また、宝暦期(1751～63)の分布からは浄土宗、法華宗寺院が際だってみられるものの、真言宗や禅宗(相運寺や妙音寺など)、浄土真宗寺院なども存在しており、2つの宗派にこの地区の特徴をみいだすことはいささか早急にすぎだろう。

それでは上相川地区の寺院はどのような特質をもっていたのであろうか。宝暦2年(1752)に元図が描かれたと考えられる「上相川絵図」には上相川地区の様子が描かれている⁽²⁷⁾。そこには上にみた寺院の境内に加え、

周辺の山々にも寺院名が描かれ、さらに上相川集落の町屋敷地の所持者名にも寺院の名前が散見される(図5-64)。詳細な分析は今後の課題とするが、ここからは上相川地区の多くの寺院が周辺の山々を寺領として所持し、加えて町屋敷をも所持していたことが明らかである。特に後者からは、開基当初から檀家や門徒を引き連れる

かたちで上相川へと移入してきたことが想像される。このように上相川地区の寺院群は中世からの寺領を引き継ぐものではないが、上相川集落の周縁部に多くの寺領や門徒を抱えながら「境内型」に類似した形態をもって寺院群が存立していたと考えられる。

以上、中・下寺町の具体的な形成過程と上相川地区に

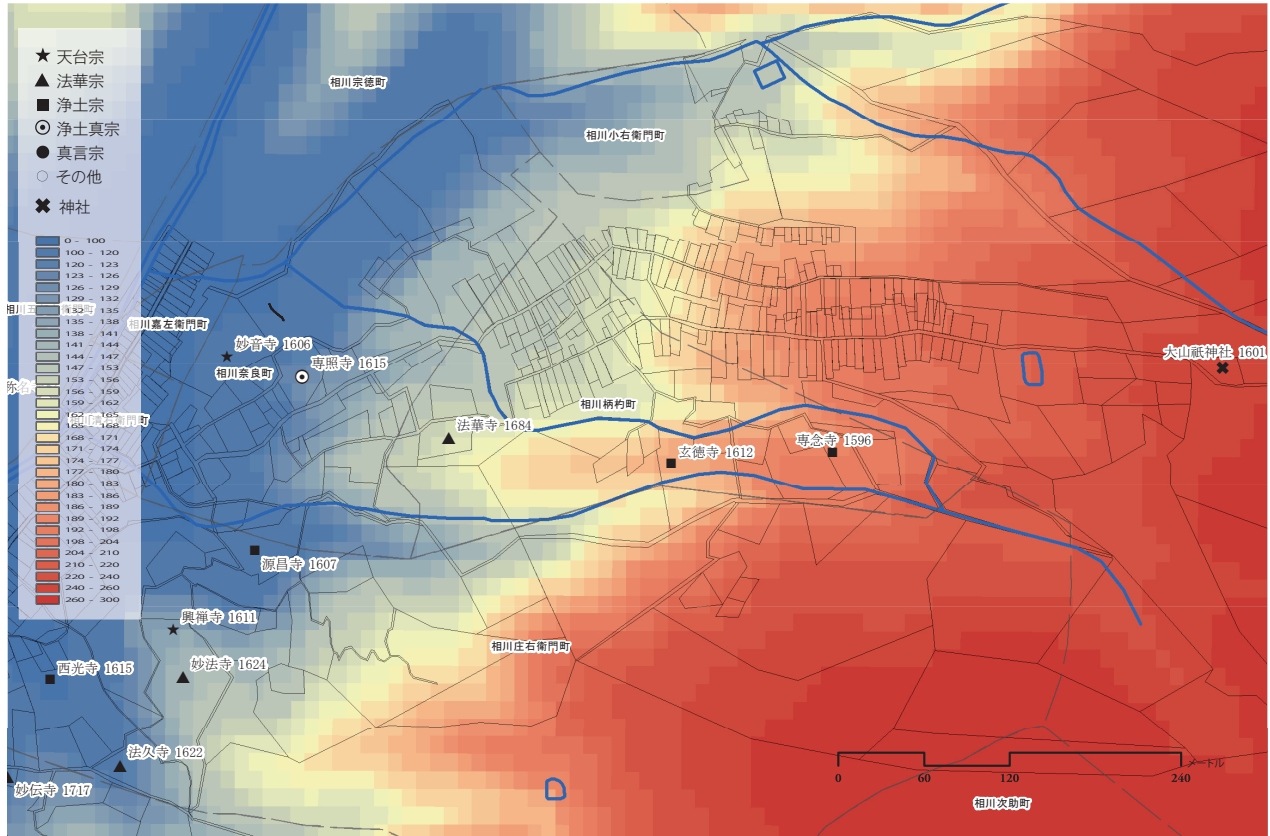


図5—63 上相川周辺の寺社分布

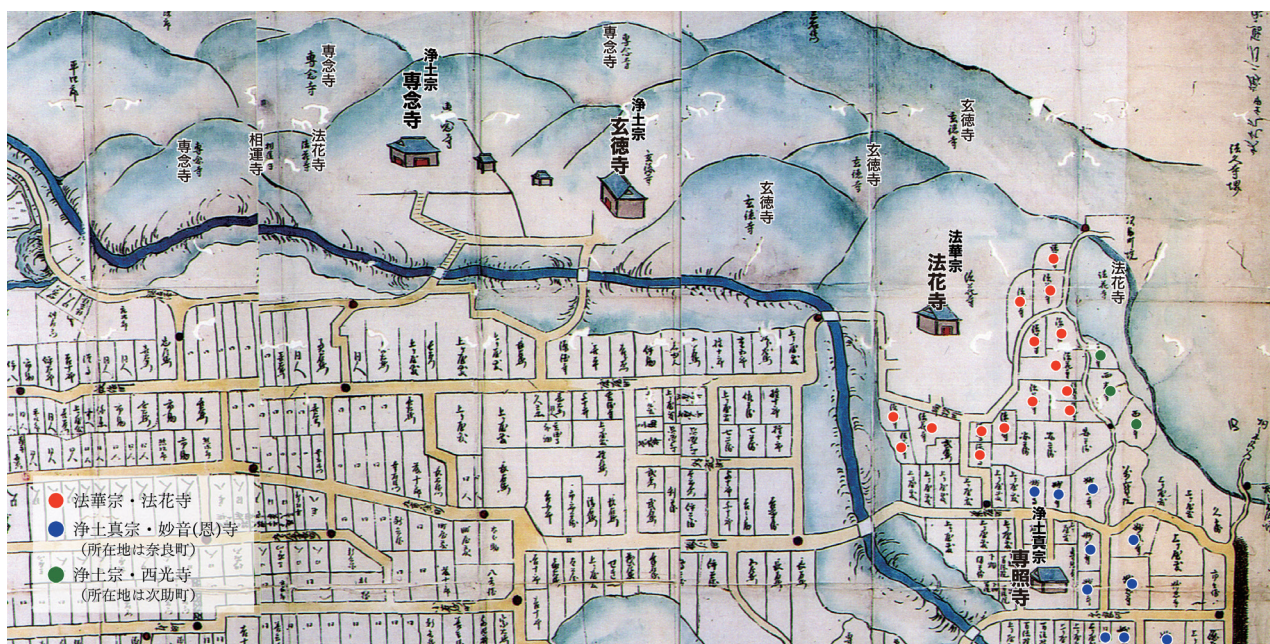


図5-64 鍛冶沢・桐ノ木沢南側の寺領と上相川集落内の町屋敷所有（上相川絵図〈部分〉に加筆）

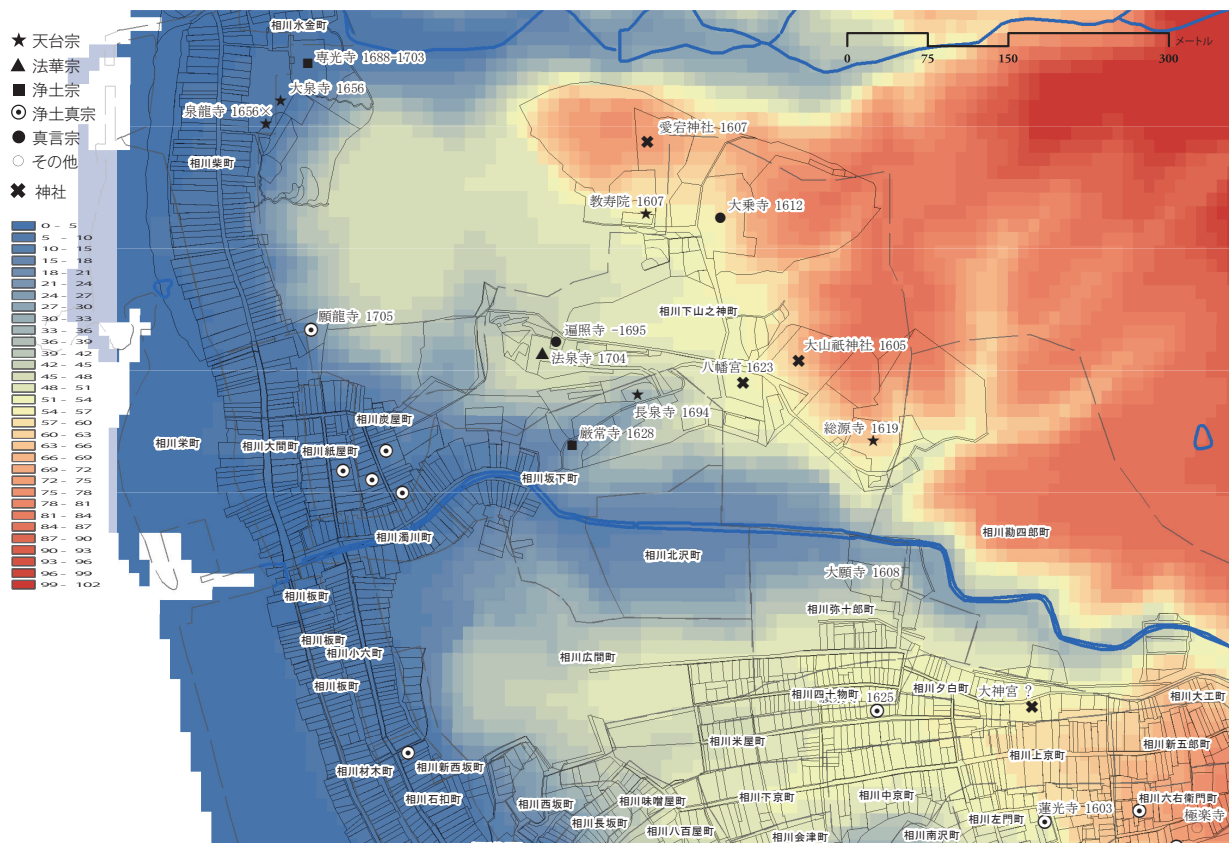


図5-65 下山之神町周辺の寺社分布

おける寺院の存在形態をみてきたが、ここには幕府によって計画的につくられる均質な「寺町」というすがたはみえてこない。後発的に開基、形成された寺院には一定の境内規模が窺え、幕府による誘致の可能性も否定できないが、ここでは各宗派の寺院による自律的な地区形成一鉾山都市相川の盛衰に 관련된寺院側の主体的な動向一がなされたと考える。

iii) 下山之神町地区一天領佐渡の神仏

続いて、上にみた寺町とは異なる寺院集中地区として下山之神町をみていこう。下山之神町地区は、濁川を挟んで上町台地の北側に対峙する台地上の下山之神町と坂下町で構成される(図5—65)。ここには寺院6寺(浄土宗1、真言宗1、法華宗1、天台宗1、禅宗2)と神社3社が存在する。他の地域にくらべ禅宗寺院が多く立地している。南西部に立地する寺院群は17世紀末から18世紀初頭にかけて起立あるいは移転したもので、この地区を特質づけるのは慶長期に建立された以下の4つの寺社群であろう。

a 大山祇神社

慶長10年(1605)に大久保石見守長安が「一国銀山の



図5—66 下山之神町付近（相川町絵図〈部分〉に加筆）

総鎮守」として建立したもので、慶長6年に上相川に「銀山之鎮守」として勧請された山之神社と対をなす神社。

b 愛宕権現—東照宮—天台宗・教寿院、同・大光院
 愛宕権現はaと同じく長安によって慶長12年に勧請され、同年には別当寺として教寿院(寛永寺末寺)が、翌年には大光院(教寿院末寺)が建立された。さらに寛永13年(1636)、佐渡奉行・伊丹播磨守によって境内に

東照宮が創建された。一山としてのまとまりをもった神社・寺院群。

c 真言宗・大乘寺

慶長17年(1613)に開基。往古は常州智足院末であったがその後武州護国院末寺となる。

d 禅宗・総源寺—八幡宮(④)

総源寺は佐渡吉井村剛安寺の末寺として元和5年(1619)に開基された。享保期(1716～35)に柴町から移設された八幡宮は、鎮目・竹村両奉行時代より祭礼がおこなわれていた⁽²⁸⁾。

さて、図5—66は宝暦期の相川を描いたとされる「相川町絵図」の下山之神町付近である。ここにはそれぞれ「山」を抱えたa～dの寺社が境内を構えている様子が描かれている。この描写は図5—65でみられる立地や地形とうまく照合する。下山之神町地区は先にみてきた寺院地区とは異なる境内地をもった寺院群によって構成されているのである。そして、佐渡金銀山の鎮守(a)や徳川家・江戸大寺院(寛永寺・護国院)との関係性などにみられる寺院群の由緒からは、佐渡相川の支配者たちによって意図的に寺院地区がかたちづくられていったと想定されるのである。この寺院地区の存在は既往研究でほとんど言及されることがなかった。従来、長安の功績としては陣屋(奉行所)の移転や上町の造成、同心町や勘定町の整備、番所の設置といった点が特筆され、佐渡代官としては鉱山経営の側面が強調されてきた。しかし、長安の時代に北沢(濁川)をはさんで奉行所に対峙する台地上に、天領佐渡の神仏を祀る寺社や江戸との関係を強くもつ寺院群が開基、創建されたことから、計画的にこの寺院地区が創出されたと考えて間違いなさであろう。そして長安以降、佐渡奉行との由緒(b・d)によってその特質は重疊的に強化されていったと考えられるのである。

以上、寺院地区自体はあらかじめ計画されたものではなく、それぞれ独自の論理と存在形態をもって地区形成がなされたことが明らかであろう。i)とii)といった寺院地区は先行する寺院群を吸着核としながら、段階的に宗派のつながりや本末関係を通してかたちづくられた。一方、iii)からは一史料的な制約もあり具体的な検証は今後の課題とせざるをえないが一他の寺院地区とは違い明確な意図と計画性が窺えるのである。これは相川の都市形成との関係においても看取されるべき点であろう。

最後に寺院地区としての展開は異なるものの最初期の寺院群の多くが緩斜面のわずかに開けた土地に起立されたことに注目しておきたい。平坦な土地の少ない相川に

おいては、第一に大地＝地形との関係が寺院の起立に際して重要な決定要因であったことは間違いない。そして、のちにみられる寺院地区というまとまりは、少なからず寺院と地形との即地的な関係から析出されたものなのである。

(4) 浄土宗と浄土真宗寺院の動向

それでは各宗派の動向からは相川の寺社地の形成はどのように捉えられるであろうか。ここでは都市型寺院としての特質をもつ浄土宗寺院と町人地に展開した浄土真宗寺院を対象に、寺院の都市への進出という側面から検討していく。

i) 浄土宗寺院の教線拡大

表5—4は「蓮門精舎旧詞」をもとに元禄11年(1698)段階の佐渡国内の浄土宗寺院をまとめたものである⁽²⁹⁾。表5—4からわかるとおり佐渡に存在する浄土宗寺院のほぼすべてが京知恩院派で、残りはいずれも同派の法界寺(現法然寺、下寺町)、大安寺(江戸沢町)、常念寺(河原田)の末寺である。また佐渡国にみられる半数の寺院が相川で起立されていることがわかる。

まず相川内に多くの末寺をもつ法界寺からみていこう。法界寺の由緒によれば、法界寺を開基した行念は応仁年間(1467～68)に佐渡に渡来し、文禄年間(1592～96)に河原田大坂町に一字を建立した。その後鶴子銀山町を経て下寺町に移ったのは慶長11年(1606)のことである。寛永11年(1634)に佐渡国の浄土宗触頭に本山より任命されている。

天文11年(1542)、河原田のすぐ南西にある五十里の奥山で鶴子銀山の開発がはじまり、天正年間(1573～92)を端緒に西は沢根から東は河原田までの真野湾海岸部には、近江国や越前国などの諸商人の来往によって町が形成されていったという⁽³⁰⁾。法界寺は鶴子銀山の開発に伴って成立した河原田大坂町に起立されたことになる。そもそも河原田には南北朝期に台頭した河原田本間氏の居城があり、天正年間には上杉氏の領有となって代官が置かれていた。相川に陣屋が移されるのは慶長9年であり、それまでは鶴子に陣屋が置かれ、戦国末期から長安の相川支配がなされるまで、鶴子・相川金銀山をめぐる都市の核は河原田—沢根にあったといえる。つまり、陣屋の移転の後を追うようにして法界寺は相川に移転したと考えられるのである。

表5—4にもどると、慶長元年には専念寺が上相川で、翌年には沢根町で舟城寺が、慶長5年には下相川村で霊山寺が開基されている。そして陣屋が移されたのちの慶長11年、相川での法界寺を含む5寺の起立を皮切りに、慶長期に14寺、元和期に10寺が相川を中心とした佐渡

国内に建立されているのである。ここからは鉾山都市の展開に随伴するかたちで京知恩院派が佐渡国での教線を拡大していったことが読み取れる。

続いて、いまひとつ相川で重要な浄土宗寺院として大安寺をみていく。大安寺は佐渡代官（のちの佐渡奉行）であった大久保石見守長安の逆修寺として慶長11年（1606）に建立された。場所は上町台地と下寺町が挟み込む南沢がつくりだした谷地にある江戸沢町である。所在地は江戸沢町であるが文政9年（1826）の「相川町 町墨引」⁽³¹⁾をみると「門前町」として江戸沢町とは別に描かれている。そもそも大安寺は相川有数の境内規模（60×80間）をもち門前町屋も付属させた大寺院であった。ところで、先にみた法界寺と大安寺は同年に起立している。長安と浄土宗との結びつきについては不明とせざるをえないが、特に（3）—iでみた18世紀中期に3宗派が林立する下寺町地区の素地は、これらふたつの浄土宗寺院にあったといえよう。

以上から推測すると浄土宗にとって慶長11年は、鉾山都市として相川が急速に拡大している時期に、その深部へと教線拡大をはかる重要な布石を打った年であったと考えられる。同年に相川内で開基、あるいは転入した浄土宗寺院は上の2つの寺院を除くと、定善寺（鍛冶町）、立岩寺（四町目西側）、源昌寺（庄右衛門町）など

である。長安による陣屋の移設と町立ての具体的内容は明らかではないが、浄土宗寺院が起立された場所はある程度町場化されていたと考えられるだろう。それは幕府の庇護や所領などをもたなかった新興勢力である浄土宗寺院にとって、都市に住む町衆にこそその存立基盤があったからである。すなわち、慶長11年に至るまでの浄土宗寺院の展開は、上相川から下町までの地域にすでに居住地（あるいは作業場）が分散的には形成されていたことを示唆しているのである。

ii) 浄土真宗寺院の定着

次に浄土真宗寺院についてみていこう。（2）でのべたように、浄土真宗寺院の移動性は極めて高く、宝暦期（1751～63）の寺院の立地や分布はそのほとんどが移動後のすがたである。まず「寺社帳」、『佐渡相川志』から移転経緯のわかる浄土真宗寺院をまとめたものが表5—5である。相川内に立地するほとんどの浄土真宗寺院は東本願寺派であり、上相川、特に九郎左衛門町に多くの浄土真宗寺院が開基していることが読み取れる。鉾山の盛衰にしたがって、合併や統合、移転を、山を下るように繰り返していった様子が窺える。ただし、注目されるのは下町から入植する浄土真宗寺院も散見されることである。町人地に入り込むかたちをとった浄土真宗寺院にとって、一挙にかたちを整えていった下町地区に居住す

表5—4 佐渡国における浄土宗寺院一覧（元禄11年＝1698「蓮門精舎旧詞」による）

	寺院名	宗派	開基（転入時期）	所在地
1	安国寺	京知恩院派	暦応2年（1339）	雑太郡安国寺村
2	常念寺	京知恩院派	永禄6年（1563）	河原田裏町
3	正覚寺	京知恩院派	大永2年（1522）	加茂郡夷町
4	法界寺	京知恩院派	応仁年中（慶長11年＝1606）	河原田大坂町→下寺町
5	舟城寺	京知恩院派	文明元年	加茂郡舟城村
6	専念寺	京知恩院派	慶長元年（1596）	鍛冶町
7	大乘寺	京知恩院派	慶長2年（1597）	沢根町
8	靈山寺	下寺町法界寺末	慶長5年（1600）	下相川村
9	大安寺	京知恩院派	慶長11年（1606）	江戸沢町
10	定善寺	京知恩院派	慶長11年（1606）（貞享元年）	下寺町
11	立岩寺	京知恩院派	慶長11年（1606）（寛永6年）	四町目西側→下戸村
12	源昌寺	京知恩院派	慶長11年（1606）	庄右衛門町（次助町桐ノ木沢とも）
13	銀山寺	下寺町法界寺末	永正以前（慶長11年＝1606中興）	下寺町
14	光照寺	京知恩院派	慶長15年（1610）	大坂町
15	極楽寺	京知恩院派	慶長15年（1610）	加茂郡吉住村
16	松林寺	河原田常念寺末	慶長15年（1610）	雑太郡牛込村
17	正源寺	夷町正覚寺末	慶長15年（1610）	川崎村
18	法円寺	下寺町法界寺末	慶長16年（1611）	下寺町
19	玄德寺	京知恩院派	慶長17年（1612）	鍛冶町
20	九品寺	河原田常念寺末	慶長19年（1614）	加茂郡三瀬川村

	寺院名	宗派	開基（転入時期）	所在地
21	広伝寺	京知恩院派	慶長年中カ（元和3年＝1617）	？→六右衛門町
22	誓願寺	下寺町法界寺末	慶長～元和カ（寛永3年＝1626）	上相川→加茂郡水津村。寛永3年（1626）に法界寺末
23	長安寺	下寺町大安寺末	元和元年（1615）	下戸村
24	来迎寺	京知恩院派	元和元年（1615）（寛文年中）	下寺町・蓮長寺境内→二町目裏五郎左衛門町（寛文年中）
25	栄法寺	下寺町法界寺末	元和元年（1615）	加茂郡湯上村
26	西方寺	河原田常念寺末	元和元年（1615）	赤泊村
27	西光寺	京知恩院派	元和元年（1615）	次助町
28	心岸寺	下寺町法界寺末	元和3年（1617）	加茂郡椎泊村
29	西念寺	京知恩院派	元和3年（1617）	左門町
30	専光寺	京知恩院末寺	元和6年（1620）	弥十郎町（元和6年＝1620）→柴町（元禄年中）
31	広源寺	京知恩院派	元和7年（1621）	五郎左衛門町→南沢町
32	大超寺	京知恩院派	元和9年（1623）	中寺町
33	光善寺	京知恩院派	元和年中（寛永7年＝1630）	長坂町→羽茂群小木町（寛永7年＝1630）
34	厳常寺	京知恩院派	寛永5年（1628）	下山之神町
35	光明寺	下寺町大安寺末	寛永6年（1629）	鹿伏村。寛文12年焼失し、大安寺へ
36	法蓮寺	下寺町法界寺末	寛永9年（1632）	中寺町
37	専称寺	京知恩院派	正保元年（1645）	雑多郡中興村

※ゴシック文字は相川市街地内に所在する寺院をしめす。

る町人は布教活動のための格好の存在であったと考えられる。また、弥十郎町や六右衛門町など山師の名がつく町に浄土真宗寺院が移転していることも注目に値しよう。山師や金子^{かなこ}(児)など鉾山労働に従事する人々と北陸地方に展開した浄土真宗門徒との関係は、井上鋭夫や佐藤利夫らによって指摘がなされている⁽³²⁾。(5)で少しふれるが、山師集団や鉾山労働者の居住地と浄土真宗寺院の立地との関係から相川の都市空間の形成について論ずることは重要な視角といえるであろう。

相川初期の浄土真宗寺院の展開や山師らとの関係を論ずるだけの十分な史料を得ていないため、ここでは浄土真宗寺院の相川への定着という視点から考えてみたい。まず着目したいのは相川中央に位置する丸山とそこから地形的な広がりをもった地域である。丸山は上町台地の東端に位置する小山である。新五郎町の湾曲する道は丸山の北端のかたちをふちどっている。図5—61をみると丸山を核とした地形的な広がりの中に新五郎町、六右衛門町、左門町がある。先にみた中・下寺町ほどではないが、丸山周辺にはいくつかの寺院が存在し、18世紀中頃には浄土真宗寺院3寺、浄土宗寺院2寺がみられる。寺町との違いは町屋敷と寺院境内とが混在していることである。浄土宗広伝寺は元和3年(1617)に丸山に境内をもつが、六右衛門町への移転は元禄12年(1699)、

西念寺の左門町への移転は貞享元年(1684)であり、この地区への浄土宗寺院の進出は17世紀末になってからのものとわかる。

佐渡国触頭である東本願寺派の蓮光寺は慶長8年(1603)に、西本願寺派の大福寺は慶長17年(1612)にそれぞれ左門町、六右衛門町内で開基されている。六右衛門町にある広円寺は、はじめ上相川の九郎左衛門町で元和元年(1615)に起立した。のちの元禄12年、元和7年にすでに六右衛門町で開基されていた同宗派の善宗寺の境内を相続するかたちで合併し、当地に根をおろしている。『佐渡相川志』によれば六右衛門町には大福寺、広円寺(善宗寺)のほかには大唱寺(宗派・開基不明)・三乗寺(宗派・開基不明)・真教寺(宗派・開基不明)があったという。これら寺院がいつ頃まで存続していたかはわからないが、左門町の蓮光寺を加えると実数として少なくとも5寺の浄土真宗寺院がこの地区に展開していたことになる。

しかし、浄土真宗寺院は町方に広範に展開しており、少なくとも18世紀段階において各寺院の境内規模や本堂などの建築形式にはさほど目立った差異はない。六右衛門町は山師であった石見六右衛門の名を冠した町であるといわれているが、彼と浄土真宗寺院との関係を示す史料はみいだせていない。また、そのほかの町について

表5—5 浄土真宗寺院の移転・合併経緯

	寺院名	所在地	寺院名	本末関係	開基・移転・合併経緯
1	願泉寺	米屋町	願泉寺	東本願寺末	九郎左衛門町(寛永2年=1625)→米屋町(不明)
			西入寺	東本願寺末	弥十郎町(不明)→柴町(不明)→米屋町(元禄年中=1688~1703)[願泉寺へ合併]
2	広円寺	六右衛門町	広円寺	西本願寺末	九郎左衛門町(元和元年=1615)→六右衛門町(元禄12年=1604)[善宗寺と合併]
			善宗寺	東本願寺末	六右衛門町(元和7年=1621)→(元禄12年=1699)[広円寺と合併]
3	願龍寺	大間町	願龍寺	東本願寺末	河原田郷鶴子(慶長7年=1602)→弥十郎町(寛永10年=1633)→紙屋町(正保年中(1644~47)[順光寺を合併]→大間町(宝永2年=1752)
			順光寺	東本願寺末	紙屋町(寛永2年=1625)→弥十郎町(正保年中(1644~47)[願龍寺へ合併]
4	光楽寺	炭屋町		東本願寺末	板町西側(慶長19年=1614)→炭屋町(元禄3年=1690)
5	称念寺	紙屋町		東本願寺末	山ノ内左沢(寛永8年=1631)[五十里炭屋町称念寺隠居所]→上相川(延宝年中=1673~80)→紙屋町(正徳3年=1713)[願龍寺跡地]
6	聞名寺	一町目裏町		東本願寺末→西本願寺末	塩屋町西側(元和4年=1618)→一町目裏町(享保3年=1718)→[元禄年中(1688~1703)西本願寺末に]
7	永宮寺	一町目裏町	永弘寺	東本願寺末	石扣町(元和3年=1617)→一町目裏町(承応2年=1653)[寺号を永弘寺と改めるが、宝暦11年(1761)再び永宮寺にもどす]
8	了円寺	炭屋町	了円寺	東本願寺末	炭屋町(寛永13年=1636)→(寛文年中=1661~72)[妙願寺を合併]
			妙願寺	東本願寺末	紙屋町(貞享元年=1684以前)→炭屋町(寛文年中=1661~72)[了円寺へ合併]
9	万照寺	諏訪町	万行寺	東本願寺末	諏訪町(元和5年=1619)→(元禄年中=1688~1703)[誠証寺を合併]→(昭和17年=1942)[専照寺と合併し、万照寺と改称]
			誠証寺	東本願寺末	山ノ内左沢(天正年中カ)→(天和年中=1681~83)[山ノ内安楽寺を合併]→諏訪町(元禄年中=1688~1703)[万行寺へ合併]
			安楽寺	東本願寺末	山ノ内(天和9年=1623)→山ノ内左沢(天和年中=1681~83)[誠証寺へ合併]
10	専照寺	奈良町		東本願寺末	奈良町(元和元年=1615)→諏訪町(昭和17年=1942)[万行寺と合併し、万照寺と改称]
11	勝善寺	炭屋町		東本願寺末	炭屋町東側(元和8年=1622)→炭屋町(元禄年中1688~1703)
12	広永寺	羽田町		加州専光寺末	中原村(慶長8年=1603)→羽田町(不明)
13	専法寺	石扣町		西本願寺末	石扣町(元和元年=1615)→[安政=1854~59以後火災により廃絶]

※ゴシック文字は宝暦頃の寺院名及び所在地

は未詳である。それでは当該寺院地区の寺院は他にくらべどのような特質をもち、また六右衛門町、左門町においてどのような存在として位置づくのであろうか。

蓮光寺、大福寺の境内地についてみてみよう。由緒によれば蓮光寺は開基に際して長安から「一七間四方ノ寺地」を下賜されており⁽³³⁾、大福寺は万治年間(1658～60)に境内地(24×25間)が除地となっている。相川に存在するほとんどの浄土真宗寺院の境内地は「町役目」が課される町屋敷であって、寺院境内と町屋は同義であった。廃寺あるいは移転してしまった寺院についても同様に境内＝町屋敷であったと考えられるが、少なくとも蓮光寺と大福寺は幕府から寺社地と認められた境内を構えた特異な存在であったことは明らかである。

続いて「元禄検地帳」⁽³⁴⁾及び「安政五年屋敷帳」⁽³⁵⁾から町内の町屋敷についてみてみよう。表5－6は元禄期と安政期の蓮光寺・大福寺・広円寺が町内に所持していた地面をまとめたものである。安政期に蓮光寺は町屋敷を6筆、大福寺は町屋敷4筆・畑地2筆を所持しており、善宗寺を相続するかたちで六衛門町に移転してきた広円寺は計12筆もの町屋敷を所持している。つまり、当該期において町内の20～30%近くの地面が浄土真宗寺院によって所有されていたのである。具体的な空間復原は今後の課題であるが、文政9年(1826)の「相川町 町墨引」⁽³⁶⁾からは門前町屋らしき様子も読み取れ、境内地や周辺で町屋敷経営をおこなっていたことを窺わせる。元禄期には蓮光寺を除けばさほど町屋敷の所持はみとめられず、鉾山の衰退がすすむ18世紀初頭から町屋敷の集積をすすめていったことが想像される。ここから、除地としての境内をもった蓮光寺・大福寺が核となり当地が近世初頭から浄土真宗寺院の拠点として寺院地区を形成していったと考えて間違いない。

ここで表5－5にもどると、元禄期に町方へと最終的に根をおろした寺院群が目立つことが指摘できる。特に濁川下流右岸の炭屋町・紙屋町・大間町周辺にも浄土真宗寺院が多く存在している。詳述はしないが、これら寺院はいずれも相川内の移転や合併を経ておおそ元禄年間(1688～1703)に当地へ定着をみている(表5－5中の3、4、5、8、11)。また、上の丸山地区でみたような町屋敷の集積は19世紀段階になると小規模ながら他の浄土真宗寺院にも少なからずみうけられる⁽³⁷⁾。これらは町方に入り込み頻々に移動を繰り返す「道場」といった移動性を備えた本源的な存在形態から、境内を構え町内に定着していくすがたを示しているのではないだろうか。町屋敷経営は浄土真宗寺院が自律的に存続するための経営基盤であったのであろう。このようなかたち

表5－6 浄土真宗寺院の所持地面(安政5年＝1858)

(1) 蓮光寺所持地面

	所在地	表×奥行(間)	種別	元禄期所持者
1	左門町南側*	5.5×19.5	町屋敷	蓮光寺
2	〃 南側*	4×7	町屋敷	蓮光寺
3	〃 東側(1)	3×13.5	町屋敷	吉兵衛
4	〃 北側(2)	3×10	町屋敷	蓮光寺
5	〃 東側(2)*	6×8	町屋敷	蓮光寺
6	〃 東側(2)*	6×6	町屋敷	蓮光寺

(2) 大福寺所持地面

	所在地	表×奥行(間)	種別	元禄期所持者
1	六衛門町南側*	4.5×8	町屋敷	次郎衛門後家
2	〃 南側*	5.5×8	町屋敷	市郎衛門後家
3	〃 東側*	4.5×20	町屋敷	大福寺
4	〃 東側*	5×20	町屋敷	大福寺
5	〃 南側裏地	3×20	畑地	徳兵衛
6	〃 南側	34×8.5	墓地	大福寺

(3) 広円寺所持地面

	所在地	表×奥行(間)	種別	元禄期所持者
1	六右衛門町南側*	3.5×4	町屋敷	市郎兵衛後家
2	〃 南側*	5.5×9	町屋敷	善宗寺
3	〃 南側*	2.5×13	町屋敷	善宗寺
4	〃 南側*	8×9.5	町屋敷	善宗寺
5	〃 南側*	3×11.5	町屋敷	六兵衛
6	〃 北側*	4.5×5.5	町屋敷	大福寺
7	〃 北側*	4×5	町屋敷	吉兵衛
8	〃 北側*	4×7	町屋敷	長兵衛
9	〃 北側*	3×6.5	町屋敷	権四郎
10	〃 北側*	3.5×4	町屋敷	宇兵衛
11	〃 北側*	3.5×4	町屋敷	宇兵衛
12	〃 北側*	3.5×4.5	町屋敷	庄五郎

左門町	計41筆 [37(町屋敷)]	6反2畝13歩	総間口 183間
六衛門町	計57筆 [54(町屋敷)]	9反5畝9歩	総間口 282間

※ゴシック文字は元禄期からの所持地面を、*は隣接する屋敷地を示す。

で浄土真宗寺院は、文字通り相川の町内へと根をおろしていったと考えられるのである。

(5) 結びにかえて一寺院と町の結合関係と小地域

以上、宝暦期にみられた寺院の立地と分布を下図として、寺院地区の形成と寺社の存在形態を、都市空間を分節的に捉えることで明らかにした。そして、浄土宗寺院と浄土真宗寺院の動向から相川の都市形成との関係を論じた。下町の崖際に展開する寺院群についてはほとんど触れることができなかったが、寺院が展開するもうひとつの地区であったことを指摘しておきたい。最後に改めてこれらをまとめることはせず、相川の初期段階での形成を考察するための視座を提示することで結びとしたい。

i) 上相川集落と寺院群

九郎左衛門町には浄土真宗寺院や山伏(修験者)が多く存在したことがわかっている⁽³⁸⁾。明暦2年(1656)の宗門帳には同町に熊野比丘尼30人と熊野山伏7人がい

たことが記載されており、なかでも清音比丘尼は初期遊郭である柄杓町を創設したとされる⁽³⁹⁾。元禄検地帳からも数多くの山伏が町屋敷を所持していたことが窺える。また専照寺は図5—64にみられるように数多くの町屋敷を所持していたことがわかり、一種の門前町の様相を呈していたと考えられる。このように浄土真宗寺院や山伏（修験者）たちは彼ら自身が鉾山関係者であり、かつ特定の職人と強く結びつくかたちで上相川集落の一部を形成していたと考えられる。具体的な空間分析は別途論ずる必要があるが、地割の形態や絵図で描かれている様子から上相川集落が一定の近世的秩序を伴ってゾーニングがおこなわれていたことが推定される。特に鍛冶沢や桐ノ木沢付近に多くの町屋敷地をもつ九郎左衛門町や鍛冶町はその形成を検証するうえで浄土真宗寺院や山伏（修験者）との関係は重要であろう。

加えて、本稿でも指摘したように鍛冶沢や桐ノ木沢南側に寺領をもつ浄土宗の専念寺や玄德寺は上相川に多くの檀家を抱えていたと考えられ、それぞれの由緒をひもときながら、上相川地区との結びつきを丁寧にみていくことこそが上相川の形成を論ずる鍵となるであろう。

ii) 山師集団と寺院との関係からみる小地域

寺社の形成からみて、相川の町は上相川から下町へと山をくだるように形成されたとは決していえない。上相川集落自体が初期鉾山開発の拠点であったことは間違いないが、数年という短い期間に居住地が現行の相川市街地に匹敵する範囲で分散的に展開していたと考える。院内銀山での屋敷割に際し、山師たちは佐渡相川の例を引き合いに出し、配下の金子かなことの居住を認めるように、銀山奉行の梅津政景に申し入れている。相川の先行研究のなかでもたびたび言及される一文ではあるが、いま一度ここから考えてみたい。

佐州などにてハ、すは町・弥十郎町・ゆふはく町など、
申候ハ、其身の金子を壺町ノ内に差置候⁽⁴⁰⁾

ここで注目したいのは、何故上相川集落の町ではなく、北沢沿いや上町台地の尾根上に展開する町が院内銀山の山師たちの先例としてあげられたのかということである。さらに『佐渡年代記』の慶長9年（1604）の条には以下のように書かれている。

相川銀山はじまりてより他国者おびたしく来り住居す、
町々の名、多くは住居の者の名を取りて唱ふ、庄右衛門
町は山仕大坂庄右衛門住し、宗徳町は田中宗徳が家あり、

諏訪町は信州諏訪の者来りて住し、（中略）新五郎町は山
仕豊部新五郎家あり（中略）夕白町は備前夕白住居、弥十
郎町は丹羽弥十郎、主兵衛坂は若狭主兵衛住し云々⁽⁴¹⁾

ここでもやはり、先の『梅津政景日記』にみられた諏訪町や夕白町、弥十郎町が記載されている。これらは上相川集落からは地形的に下った地区の町々なのである。慶長9年は長安が相川の支配を開始するまさにそのときである。これらから読み取るべきは単純に山師の名を冠した町が存在したという事実よりも、むしろ長安の支配以前に山師が自生的につくりだす居住地が上相川集落の外部、沢沿いや上町台地へと続くやせ尾根沿いに多く展開していたという居住の実態であろう。のちに名が残されたということは、先行する居住地が「安堵」されることで「町」として「相川」に取り込まれていったと考えるべきではないだろうか⁽⁴²⁾。間歩直近に位置する上相川の町は相川最初期の居住地であり、上にあげられた町々は一時間的差はあまりないものの—いわば二次的な居住地であろう。院内銀山へ居住しようとした山師たちの先例としてこの二次的な町々の名が出されたのは、後発の居住地でありながら山師集団による居住が「町」として認められた事例だったからこそと解釈できるのではないだろうか。つまり、長安の町立て以前に、すでに上相川以外にも多くの分散的な居住地、すなわち山師の抱える技術者集団が沢沿いなどを拠点として活動していたのである。

このように考えたとき、寺院や寺社との存在から注目されるのが間ノ山に位置する惣徳町・清右衛門町・嘉左衛門町・庄右衛門・五郎右衛門町の5町である。これらも山師の名前を冠した沢沿いの町々である。浄土真宗の長明寺（南沢町）は間ノ山の山師（間山氏+下田氏）らが有力門徒であった。さらに北沢の北岸にあったと考えられる浄土真宗の称名寺もやはり間ノ山の山師集団との結びつきが推定される。ここからは初期的な山師集団と寺院との結びつきが窺えるのである。また時代はくだり元禄2年（1689）のこととなるが、この5町の鎮守として関東稲荷がやはり北沢を挟む北側の土地に建立されており、この5町のまともりは初期的な共同体が変容しながらも残存していることを示唆している。

鉾山都市相川の全体性をアブリアリに前提せず、寺院の由緒や形成に基づいて町との結合関係をひもといていくことが、相川の近世都市化を明らかにしていく重要な視点となりえるのではないだろうか。（高橋元貴）